



第 45 回 (平成 22 年 1 月 13 日) 定例会の講演要旨

『地域の古建築』

時計台、旧簾舞通行屋、札幌控訴院等に関わって

札幌市時計台次長 門谷陽氏

主に 簾舞通行屋、平野彌十郎日記と安達喜幸について 時計台の建物についての 3 点についてお話をいただきました。



1. 簾舞通行屋

《歴史的概要》

明治 10 月に有珠新道が完成し明治 5 年 1 月に通行屋完成し開業する。が札幌本道の開通により利用者激減で明治 17 年廃止となる。明治 19 年定山溪までの新道開設に伴い明治 20 年頃移築、現建物に増築宿屋として利用。その後事務所、教育所、出張所、下宿、旅宿等に利用され大正 7 年、定鉄開業と共に宿業廃止。

《資料による検証》

・ 開拓使直営簾舞通行屋の今昔・北大図書館図面

旧棟、新棟は逆ではないかとの指摘もあったが、平成 11 年に保存会から発行された難解な報告書を検証し、北大北方資料室デジタルライブラリーの図面とも照合してみると

旧棟は洋小屋組み、柱材は新しく、丸釘が使用されているが、当初平面とも合致し、当初の姿を伝えていると押さえられる。

新棟は和小屋組み、柱材は古く、角釘が遊び釘等使用されているが、通行屋廃止後の明治中期の増築したものと押さえられる。

2. 平野彌十郎日記と安達喜幸

平野彌十郎

本業は土木請負業ですが、明治政府、開拓史の役人ともなり今でいう起業家である。明治 5 年札幌丸山村から銭函までの道路付け替え工事、明治 15 年厚別水車機械所への新道改築等を担当する。詳細に日記にまとめており、三樽別の通行屋記載がなされていないか期待されたが記述されていない。が開拓史の文書類に記載されているか今後の調査が待たれる。

安達喜幸

開拓史工業局営繕課首席建築技術者として北海道における洋風建築事業に貢献し、開拓使札幌本庁舎を手がけ、演武場、時計台、豊平館の実施設計者で中心技術者として関わってきた。

3. 時計台

安達喜幸氏の曾孫(明代さん)がひいお爺さんが時計台を設計したと書いた作文の放送に対して、間違いであるという抗議があり、遠藤明久氏が中心となり周到な調査により喜幸ら日本技術者が洋風建築の知識技術を習得し建築の設計がなされたことを明らかにした。

建築部材としては桎の使用が亜鉛鉄板の下に残されていた各年代の桎からうかがえる。また角釘や下見板、野地板、小屋組み等に特徴がみられる。

豊富で克明な資料(説明原稿、写真コピーなど)を準備され、限られた時間内では十分意が伝わらなかった面もあり、講師の意の伝わった要約が出来ておりませんので、再度資料に戻って確認頂きたいと思ひます。

[文責：阿保]

手稲歴史年表・手稲鉦山研究報告書

刊行記念懇親会 盛会裏に終わる

1月29日、手稲歴史年表・手稲鉦山研究報告書の刊行記念懇親会が行われました。ご来賓の方々14名を含め55名の参加者で、盛会裏に終わりました。会は、伊澤敏幸副会長の司会で進められました。ここに、ご挨拶の一部を掲載させていただきますが、紙面の都合で一部割愛させていただきましたことをお許しください。また敬称は略させていただきました。(小田)

1 主催者あいさつ 手稲郷土史研究会会長 國井和夫

(前略)本日はご案内のように私共4年間の研究の成果と致しまして手稲の歴史年表をまとめることができました。ご承知のように手稲は明治5年の開村でございます。これから数えましてまもなく140年を迎えるわけですが、この140年間の歴史を辿って年表を作りました。これは私たち研究者にとりましても基礎的な資料といたしまして一生懸命取り組んでまいりまして、発刊の運びとなりましたので、日頃何かとご支援を賜っております関係者の皆様に、ご紹介を兼ねて発刊記念・懇親会ということで、ご案内を申し上げたところでございます。(中略)

それから、もう一つ研究資料をお届けしております。それは手稲鉦山に関する資料でございます。この研究会には手稲鉦山部会がございまして、同様に研究を進めてまいりました。今日お配りしましたものは、その部会の研究成果の一応のまとめとしての内部資料でございます。丁度、年表と同時にまとめることができましたので、ご参会のみなさまにもお届け申し上げてご批判を仰ごうということになりまして、お手元に差し上げたような次第でございます。どうか、お目通しの上、ご指摘いただきますようお願い申し上げます。(後略)



2 刊行報告

(年表)手稲郷土史研究会副会長 茂内義雄



(前略)この年表の組み立ては二つになっております。年表本体と資料編です。一つ目の年表は、明治、大正、昭和50年を境にしまして昭和前期と昭和後期、そして平成の今日にいたるまでの構成になっております。(中略)

もう一つは、この年表の信憑性を裏付けるものでございます。私共は、資料につきまして関りもちながら作業を進めてまいりました。かなりのページ数をとりましたけれども出典一覧を後ろに掲げました。(中略)

この年表から見える手稲ならではの証拠を二つお話ししたいと思います。

昔々、明治2年11月ころでしょうか、函館戦争がようやく終わりをとげ大急ぎで開拓という役所ができたのです。この役所のお役人さんが島義勇、開拓使判官です。東京を発ち、函館、小樽、そして銭函へと足を踏み入れます。本当に何も無い当時の札幌に街づくりをするためにやってきました。季節は11月、12月、真冬です。さて見回しても、回りは銀世界、何も目印になるものはありません。そこで札幌と銭函に^{のろし}烽火をあげてそれを目印に積雪の中、伐木に着手しました。私たち手稲の住民としては、ここの道路作りも島の業績としてもう一度見直したいものです。

話は一足飛びに130数年経って私共の手稲区に目を転じます。手稲区の両端に位置します新発寒と星置この二つの地域は何も無い原野に素晴らしい街ができました。この発展ぶりは島の事蹟と重なって見えてきます。(中略)

石狩や小樽に関係したこと、山口運河、光風館、前田農場をはじめとするたくさんの牧場群、北日本飛行学校な

ど、まだまだお話ししたいことがありますが、このへんで終わらせていただきます。

(鉾山) 手稲郷土史研究会事務局長 鈴木清士

皆さんのお手元に届いている「手稲鉾山報告書」は、内部資料ということで作ったものです。昨年の10月に札幌市の方から「札幌市市民まちづくり活動促進助成事業」ということで助成金をいただくことになりました。そのあとで、内部資料ということだけではなく、一般の方にも見ていただくということになりました(中略)

時間の都合上、一点にしばって申し上げます。



課題は、私たち国民の貴重な産業遺産であります手稲鉾山の跡地を今後どのように活用していったらよいかということでございます。それにつきましては、道工大の椎野先生を中心としましてゼミの学生の方々から貴重な提案をいただいております。報告書の28ページに「手稲鉾山エコミュージアム構想」というのがでております(中略)。後ほど椎野先生からお話があるかと思いますが、詳細についてはお帰りになってからでも報告書を見てください。

問題は、このような構想がありましてもこれを実現するためには、三菱マテリアルさんの協力がなければ何事もできません。また財源も必要なことですので、今すぐ実現という訳にはいかないと思いますが、手稲鉾山の跡地の活用について、皆さんに認識しておいていただければ何かの機会にPRしていただければありがたいところです。

手稲鉾山の遺跡につきましては手稲区にとっては大切な資産だと考えておりますので、今後とも皆様のご理解とご協力をいただければ幸いです。

3 来賓紹介

司会者から、次のご来賓の方々の紹介がありました。

榊沢正史(手稲区市民部長)、今枝健(手稲区連合町内会連絡協議会会長)、真鍋秀夫(手稲区連合町内会連絡協議会副会長)、田島優(手稲区小学校長会会長・稲積小学校長)、岡田信一(手稲区育成委員会連絡協議会会長)、成田則義(手稲区商店街振興組合連絡協議会会長)、丹伊田和義(手稲文化協会会長)、田中敦士(まちづくり推進係長)、林俊一(エコマネジメント株式会社手稲事業所長)、椎野亜紀夫(北海道工業大学空間創造学部准教授)、西尾貞敏(元手稲鉾山職員)、鈴木哲夫(山の手博物館長)、竹田輝雄(北海道文化財保護協会副会長)、村山耀一(石狩市郷土研究会会長)

4 来賓あいさつ

手稲区市民部長 榊沢正史

本来でしたら、手稲区長の野原がまいりましてご挨拶申し上げるところでございますが、あいにく所用のため出席されませんので、代わりに私からご挨拶申し上げます。

この度は、「手稲歴史年表」そして「手稲鉾山研究報告書」のご刊行、心よりお祝い申し上げます。

せんだって、歴史年表を拝見させていただきました。江戸時代から平成まで長い期間にわたって、大変多くの事柄をまとめられております。先ほど茂内副会長さんからお話ございましたように、項目ごとに出典史料が明記されてございます。このことに、まず目を引かれた所でございます。歴史に向き合い膨大な参考資料を丹念に紐解かれた様子がうかがわれまして、制作に当たられた皆様のご苦労が大変なものであったろうと、拝察したところでございます。

(中略)



区の事業の一環として区内の小学校、そして手稲記念館が貯蔵する歴史資料をデータベース化しまして、手稲区のホームページで公開をしております。更には手稲区ガイドマップの作成、手稲歴史発見マップツアーなどを行なっております。また手稲区制 20 周年のイベントとして行なわれました手稲歴史交流会、昨年末に行なわれました三市連携まちづくり講演会、これらで手稲あるいは周辺の歴史について講演を行ないましたけれども、参加者が大変多く市民の歴史への関心が非常に高まっていると感じたところでございます。これらの事業につきましては、手稲郷土史研究会の皆様のご尽力よるところが非常に大きく、改めて感謝申し上げますと共に手稲区政へのご協力をお願いを申し上げたいと考えているところでございます。(後略)

手稲区連合町内会連絡協議会会長 今枝健

本日は、手稲区郷土史研究会の國井会長様ほか会員の皆様方が、1,500 余りの資料の中から紐解かれたこの手稲歴史年表の刊行記念の懇親会に、お招きいただきましてありがとうございます。

この歴史年表を発行されたことによって新たな手稲の街づくりに手稲の人々に心強いヒントを与えられるとともに、また新たな歴史に対する関心が出てくるのではないかと思います。また皆様方に対する手稲郷土史資料館についての期待も高まってくるのではないかという感じがいたします。



現在、伝統と格式のある美術館でも最近は幅広い着想を求められ、従来の意識では難しいという空気もあるようですが、この世界でも変化を求められているようです。2009 年世相は「新」という漢字一文字で示されましたが、閉塞感をいただくようなせつない思いも込められているように思われます。しかし、逆転の発想で、目的を持ち一步一步前進しながら、ここで研究されたことをヒントとして、みんなが喜ぶような街づくりを行い、次代の人達に引き継いでいけるものと思っておりますので、今後も頑張っていたきたいと思っております。(後略)

5 閉宴の乾杯 手稲区連合町内会連絡協議会副会長 真鍋秀夫



6 閉宴の乾杯 手稲郷土史研究会副会長 一ノ宮博昭



7 テーブルスピーチ

北海道工業大学空間創造学部 准教授 椎野亜紀夫



手稲郷土史研究会相談役 野村武雄

ここでは、裏方として、刊行に携わっていただいた方々の紹介がありました。

茂内義雄（資料収集・編集）、鈴木清士（報告書編集）、立花顕次（データ入力）、加藤利昭（資料収集）、林俊一（エコマネジメント株式会社手稲事業所長）、三国勲（手稲鉱山関連データ収集）、西尾貞敞（資料提供・元手稲鉱山勤務）、鈴木哲夫（資料提供・山の手博物館館長）



身近な手稲史 一冊に

郷土史研究会が年表刊行



札幌・手稲の歴史愛好者らでつくる「手稲郷土史研究会」（国井和夫会長）が、明治から昨年までの区内の出来事をまとめた冊子「手稲歴史年表」を刊行した。町内会誌や新聞の切り抜きなど、参考にした資料は1500点を超える。主要な出来事だけでなく、区内を訪れた演歌歌手のことなど、イベントや市民生活に触れ、読み物としても楽しめる。（上田貴子）

資料1500点 情報細かく

手稲は1872年（明治5年）に開港し、2005年に完成した同区、演歌歌手の活動の柱にしてきた。最も参考にしたのは、1971年に地域を発行された「手稲百年のあゆみ」年表だが、この年以降は特に会費や区民から資料を収集、住民に開示する類な情報を盛り込んだ。例えば、96年の種で手稲を知る一冊になりましたと胸を張る。また、同研究会は会費による手稲山研究の報告書もまとめた。いずれもA4判。年表は140円で1200円、報告書は45円で500円。年表は1200部、報告書は1200部を作製した。問い合わせは上仙さん ☎011・682・1092へ。

北海道新聞（2010年2月2日夕刊）

